

「神の選び・招き・恵み」
サムエル記上 16 章 1-13 節

イスラエルの初代王として立てられたのはサウルでした。しかしサウル王は、次第に神さまから心が離れて行ってしまいました。そこで神さまはサムエルに言いました。“サウルはわたしから離れてしまった。わたしはイスラエルを治める王からサウルを退け、別の人物を王にする”と。

サムエルは、神さまから告げられたベツレヘムの町に入ると、いけにえの会食にエッサイとその息子たちを招きました。はじめ、サムエルは、神さまが言われるのはエリアブではないかと思いました。なぜなら、彼は長男で、背が高くてカッコよかったからです。サウルが選ばれた時も、サウルは「美しい姿で背丈はだれよりも高かった」（サム上 9:2）とあります。だからサムエルは、サウルに似た者が選ばれるのではないかと思ったのかもしれませんが、しかし、そのとき神さまはこう言われます。「人は目に映ることを見るが、主は心によって見る」（16:7）と。

この時、ダビデが選ばれることになるのですが、聖書はダビデのことを何と形容しているかというと「彼は血色が良く、目は美しく、姿も立派であった」というのです。18 節にも「言葉に分別があって外見も良く、まさに主が共におられる人です」と記されています。

思わず“なんだよ、やっぱり見た目かよ”と、ツッコミを入れたくもなってしまいますが、けど果たして、神さまが言われる「人は目に映ることを見る」というのは、外見のことなのでしょう。また、「主は心によって見る」というのは、私たちが考えるような内面のことを言っているのでしょうか？

ここで言われている「人は心によって見る」というのは、外見を見るということではありません。そうではなく、私たち人間が、自分の感覚に基づいて、外見、内面も含めて総合的に人を判断していることを語っているのです。簡単に言えば、私たちが、あの人は優しいとか、怖いとか、こういう人だと思っていることです。それは外見だけでなく内面も含めた判断です。そういう人間の判断のことを言っているのです。

それに対して「主は心によって見る」というのは、神さまは、ご自身の御心によって人をご覧になっているということです。つまり、神さまは、ダビデの外見の美しさとか、その心が正しく正直だとか、信仰深い、なんてことをご覧になったものではありません。人をそのように見るのは、「目によって見る」人間です。神さまは、こういう人だからとか、そんな理由によってではなく、神さまご自身の御心に基づいて人をご覧になり、選び、立てられ、用いられるのです。ですから、ダビデはなぜ神に選ばれたのか、という問いの答えをダビデの中に見出すことはできません。その答えは、主なる神の御心にこそあるもので、逆にそこにしかないのです。アブラハムはなぜ選ばれたのか。なぜモーセでなければならなかったのか。それは私たちにはわからない。神さまが、「これ」と決めただけでしか言えません。

ダビデも、神さまに用いられるために選ばれ、王として立てられました。しかし、神さまは、ただダビデをイスラエルの王様とするためだけに油注がれたのではありませんでした。では、神さまはどのようにダビデを用いられたのでしょうか。それは、ダビデの子孫からこの世に救い主イエス・キリストを送るためでした。それこそが神の計画であり、目的でした。そのことのために、神さまはダビデを選んだのです。

次聖日からは、その救い主の誕生を待ち望むアドベントを迎えます。神さまは、外見の美しさでも、心の清さでもなく、およそ選ばれる理由などないような者をご自分のもとへと招いてくださっています。そのために救い主イエス・キリストは来てくださいました。清く正しい生活も出来ない、立派な行いも出来ない、そんな私のために救い主イエス・キリストは来てくださった。そのことを感謝するクリスマスを今年も迎えたいと願います。